

第83回麻布獣医学会 一般演題14

3DCTにて犬の頸部椎間板ヘルニアを診断した5例

田村 勝利^{1,2}, 小田切時彦¹, 長島 奈歩¹, 伊豫田桃子¹, 齋藤弥代子²¹愛甲石田動物病院, ²麻布大学

[はじめに]

頸部椎間板ヘルニアは犬において比較的良好に発症する疾患である。とくに、ダックスフンドを始めとする軟骨異栄養性犬種において多く認められる。椎間板（髄核，線維輪）が突出あるいは逸脱した結果，脊髄，脊髄神経そして神経根部を圧迫し，神経学的異常や痛みを生じる。犬の椎間板ヘルニアを治療するうえで，病変部位の特定など早期でかつ正確な診断が重要となる。しかし，特に頸部椎間板ヘルニアにおいては従来のCT単体や脊髄造影による検査では，短時間での正確な確定診断が難しい場合があるといわれている。

近年，画像診断検査の進歩によりCT検査より得られた画像にコンピュータ処理を加えることにより，より多くの情報を得られるようになった。しかし，獣医学領域ではその報告例は少ない。今回，CT所見にワークステーションであるVirtual Place Advance Lexusによるコンピュータ処理を行ったところ，犬の椎間板ヘルニアを短時間かつ詳細に把握診断することができたのでその症例について報告する。

[材料および方法]

平成20年3月より5月に頸部痛にて来院した2～8才の犬5例にメドトメジン鎮静下にてCT検査を実施

した。CT検査後Virtual Place Advance Lexusにて3DCT，CT内視鏡モードを実施し頸部椎間板ヘルニアの病変部位の特定および観察を行った。

CT装置は東芝メディカルシステム社製Asteionを用い，ワークステーションはAZE社製Virtual Place Advance Lexusを使用した。

[結果]

今回の5例とも頸部椎間板ヘルニアの診断と病変部位の特定が可能であった。手術時の所見と画像所見とは一致していた。5例とも頸部脊柱管内に椎間板物質の突出および脱出をおこしていた。

[考察]

今回，5例とも短時間の鎮静下にもかかわらずCTとワークステーションVirtual Place Advance Lexusを使用することにより椎間板（髄核，線維輪）の突出および脱力の様子が詳細に観察でき，ヘルニア物質による圧迫の程度も含め病変部位の確定ができた。したがって，CTとワークステーションVirtual Place Advance Lexusは犬の頸部椎間板ヘルニアの診断と病態の把握に有効な検査方法の一つとして考えられた。

今後，さらに症例を増やし検討を重ねたいと考えている。